

主 題：救い主の母マリヤ**聖書箇所：ルカの福音書 1章46－55節**

ひと言、お祈りします。「父なる神さま、私たちはあなたの助けを必要としています。あなたが働いてくださって、私たちにあなたの真理を教えてください、その真理を悟らせてください。その真理に基づいて私たちが歩んで行くことができるように。あなたのみことばが、私たちの生き方を変えていきますように。主よ、どうぞあなたのみこころを為してください。あなたのみことばをどうぞあなたが祝してくださるように。イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。」

新約聖書、ルカの福音書をお開きください。今日、私たちは1章46－55節をgoいっしょに見ていきます。私たちが見るのは、この救い主イエス・キリストの母マリヤのことです。46節からはマリヤの神に対する称賛、神を誉め称える歌が記されています。46－47節「わがたましいは主をあがめ、:47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」、神に対する感謝、称賛です。神を誉め称えているマリヤの様子を伺い知ることができます。彼女は「主をあがめる」と言います。つまり、彼女は主の偉大さを誉め称え続けていく、私は習慣的に継続してこの偉大な私の主のすばらしさを称え続けていくと、そのことを彼女は最初に歌っているのです。確かに、このマリヤの称賛を見る時に、これは旧約聖書にあるサムエルを生んだハンナの賛美とよく似ています。それもそのはずです。マリヤはユダヤ人としての厳格な教育を受けているからです。それは旧約聖書のみことばをしっかりと学ぶことです。ですから、マリヤは豊富な聖書の知識を持っていたことを私たちは伺い知ることができます。しかし、彼女はその知識を持っていただけではないのです。彼女はみことばが教える主を彼女自身の神として心から受け入れてこの救いに与っていたのです。ですから、彼女の心からなるこの賛美を見る時に、彼女が神としっかりとつながっていたということを私たちは見ることができます。この彼女の歌には喜びと感謝が溢れています。主に対する感謝がこの歌には溢れています。そこには理由があったのです。今日、私たちが見ていくのは、マリヤが主を誉め称えたその八つの理由です。マリヤはこのような理由によって神を誉め称えたのです。そして、私たちはそれを見る時に、確かに、この神は称賛に価するお方であるという確信をいただきます。

☆マリヤが主を讃えたその理由**1. 救い主 46, 47節**

先ほどに見た46, 47節で「私の神は私の救い主である」ということをマリヤは喜んで言っています。「わが救い主なる神」です。確かに、この文脈を見ると、これは罪からの救いのことを言っています。ある人たちは「これは危険からの救い」と言います。確かに、そのようなときにも救いということばを使いますが、文脈を見ると、罪からの救いのことであることは明らかです。なぜなら、この1章を見ると、御使いガブリエルがマリヤに「救い主の降誕」のことを告げているからです。エリサベツが「救い主の降誕」のことを話します。ですから、明らかにこの文脈からはマリヤが「私は主をあがめます。わが救いの主なる神を喜びます。」と歌ったのは、これは罪からの救い、罪の赦しであることは明らかです。罪からの救い、そして、神との和解、そして、このすばらしい主との交わりを回復してくださる救い主、マリヤはこうして神を、そして、救い主を讃えることによって、彼女自身も私たちと同じように救いが必要であったということを明らかにしているのです。彼女は罪のない聖母ではないのです。私たちと同じように罪をもった救いを必要とする罪人だったのです。その彼女が救いをいただいたその主を心から誉め称えているのです。「私の神は救い主だ」と。それゆえに、彼女はこの神を誉め称えました。

2. 恵みに富んだお方 48, 49節

48節「主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。」、マリヤは神が恵みに満ちあふれたお方であるということを確認しています。

1) 救い

その恵みは第一に「救い」に及びました。彼女をその恵みによって救いへと導いてくださった

ゆえに、彼女はこの神を讃えています。「主はこの卑しいはしために」と記されています。「はしため」とは「奴隷」という意味です。そして、「卑しい」とは身分や地位が低いという意味がありますが、マリヤが言っていることは社会的に私の地位がどうかということではなくて、「本当に私は取るに足らない者です。私はあなたが目をかけてくださる、そのような資格も値打ちもない者です。」ということです。彼女はそうのように告白するのです。ですから、主は「目を留めてくださった」と言うのです。これも面白いことばですが、「顧みる、何かに心を留める、顧慮する」ということばで、その人のことを気にかけてたり心配するという意味です。ですから、マリヤはここで「こんな私に神は気を留めてくださった、心を留めてくださった。私のような者を見てくださった。私のことを気にかけてくださった。そして、その神が私を救いへと招いてくださった。」と、そのことを彼女は主に感謝しています。神は私のような者を罪から選び出してくださり、この恵みへと導いてくださったと言うのです。

2) 主の母として選ばれた

同時に、「主はこの卑しいはしために目を留めてくださった」、何と神はこの姉妹を救い主の母として選ばれた、大変な名誉が与えられたのです。だから、彼女は「ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。」と言って、救い主の母として神は私を選んでくださったと言います。ですから、48節でマリヤは「私の神さまはこんな者に目を留めてくださり、こんな者を心に掛けてくださり、このようなすばらしい祝福を与えてくださった。救いを与え、そして、救い主の母としての大きな務めを私にくださった。」と言って神を讃えるのです。私たちもそのことを讃える者です。こうして今救いを喜んでいるのもすべては神の一方的な恵みであったと…。

3. 全能のお方 49節

49節「力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。」「力あるお方」、あらゆるものに優るその力をもっていらっしゃる方が私にすごいことをしてくださいましたと言います。何のことでしょう？恐らく、彼女が言わんとしたことはイエス・キリストを身ごもったということです。ルカの福音書1:30-37には御使いがマリヤのところに現われて語っている様子が記されています。「すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。:31 ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。:32 その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。:33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」:34 そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」と、つまり、マリヤは御使いから「あなたは男の子を産む」と言われました。それを聞いたときにマリヤは「どうしてそのようなことが起こり得るのでしょうか？神さま！」と、人間的には不可能なことですと答えました。しかし、御使いが言った通り、彼女は身ごもるのです。「:35 御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。:36 ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。:37 神にとって不可能なことは一つもありません。」。彼女が一番確信していたでしょう。神が言われた通りにすべてのことが成るということ。神が言われたから身ごもるのです。

この処女降誕という大きな奇蹟、そのことを一番強く感じたのはマリヤ自身だったでしょう。なぜなら、自分の胎にあって男の子が動くのです。他の子どもたちと同じように、もちろん、彼女にはこれが初めての子どもですが、お腹の中でその子が足を伸ばしたし、蹴ったり、動き回ったりする。彼女はそれを感じながら、確かに、主がおっしゃった通りのことが私の身に起こっていると。ただ私たちが「大きなことをしてくださいました」とそのように言うのではなくて、彼女は本当に確信をもって「考えられないこと、あり得ないこと、絶対に人間的には不可能なこと、そのことを神さまはしてくださいました」と言います。十月と十日、彼女はこの救い主を自分のお腹の中に宿し養うという体験をしたのです。きっと彼女は何度も思ったことでしょう。生まれて来るこの子が約束されていた待望の救い主であることを。そのすばらしい救い主を私は宿している、生まれた後、この子は人々に救いをもたらす者としての働きをなさると…。ですから、マリヤが「力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。」と言って、処女である私に神がこの子を宿してくださいました、このようなすばらしい奇蹟を主が私にしてくださいましたと、そのことを体験したマリヤは心からこの主を誉め称えたのです。「私の神は偉大な神、全能のお方である。」と。

4. 聖なるお方 49b節

「その御名は聖く、」とあります。彼女は「私の神は聖い神である」と告白します。すべての被造物によって崇拝されるに価するお方である。すべての被造物が畏れを抱くお方であると言うのです。思い出しませんか？イザヤがこの主の前に立った時に、高くあげられた王座に座しておられる神を見た時にこのように言いました。イザヤ書6：5「そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の【主】である王を、この目で見たのだから。」と、イザヤは真の神を目の当たりにしたのです。その時に彼はただひれ伏して「私はもう滅ぼされてしまう。この神は余りにも聖い神であり、私のような者がこの方の前に立つことができない。」と言うだけでした。彼の心は非常な恐れが支配しました。

マリヤはここで神のご性質、属性を並べたものではありません。明らかに、彼女は私の神はどのように聖い正しい方であり、この方が私のすべてのことを見ておられる、私はその方の前に立たされているのだという、そのような思いをもっていたのでしょうか。だから、このような信仰者としてそれにふさわしい生き方を彼女は歩み続けたとそのように確信します。彼女はただ知識を述べたのではないのです。彼女は自分の神が聖い正しい神であり、その方に対する正しい恐れをもって歩んでいたから「私の神は聖なるお方である。」と言うのです。

5. あわれみ深いお方 50節

50節「そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。」と、マリヤは「私の神は罪の中にいる者たちをあわれんでおられる」ということを知っていました。罪人をあわれんでくださる神、罪人が当然の報いである永遠の滅びに至っても知らん顔をされる神ではなくて、罪人が滅びに至ることに心痛めてご覧になる神です。エゼキエルはこのように言っています。エゼキエル書33：11「彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。——神である主の御告げ——わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』と。神はこの救いを拒んでいる者たちが死に向かっている様子を見て決して喜んでおられません。その様子を見て心を痛めておられます。それゆえに、神はすべての罪人に救いの御手を差し伸べておられます。そして、感謝なことに、このあわれみ深い神は罪の赦しを求めるすべての人に救いをもたらしてくださるのです。しかし、そのための条件がここに記されています。「そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。」と、主を恐れかしこむことが必要であることをマリヤは言っています。

ご存じのように、この「恐れ」とは怖がることではありません。主の対する畏敬の念であり、尊敬の念を抱くということです。別の言い方をするなら、主に逆らうことを止めて、主を愛し、主を崇めることです。そのような者を神はあわれんでくださるとマリヤは言うのです。確かに、主に救いを赦しを求めるなら、主はそれを与えてくださいます。そのために私たちはこの方を恐れかしこむことです。これまで恐れかしこんで来なかった私たちが、その罪を神の前に悔い改めて、神であり救い主であるこの方を心から敬い、心から愛し、この方を受け入れようとする、その時に神は私たちにあわれみを与えてくださるということです。イザヤはイザヤ書55：7でこのように言っています。「悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。【主】に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。」と。感謝なことに、神は私たちが神の前に救いを求めるなら、私たち罪人を赦して受け入れてくださいます。そして、そのようにして私たちもこの救いに与りました。救いに価しない私たちを神は一方的にその救いへと招いてくださったのです。そして、私たちは自らの罪を悔い改めてこの主の救いにこのあわれみに与ったのです。マリヤはそのことを思い、そしてその神を誉め称えています。「私の神はあわれみ深い方である」と。

6. さばき主 51－53節

51－53節「主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、：52 権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、：53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。」と、ここでマリヤは神に逆らう者に対する神のさばきのことを言っています。実は、46－50節まではマリヤは自分に対する神のみわざを覚えてその神を讃えています。主が私に何をしてくださったのか、そのことを思い返してその神を讃えるのです。そして、51－55節は、今度はイスラエルに対して神がなさったみわざを思い出しながら、その神を讃えています。これまでの歴史を振り返る時に、確かに、神はイスラエルに対

して、罪に対してさばきを下されました。彼らが敵に敗北して神の前に悔い改めたとき、神は彼らを救われました。しかし、また彼らが神を忘れ、そして、高ぶったときに神は彼らをさばかれました。それはイスラエルだけではなく、多くの人が、多くの国々が同じようにして神に逆らいました。イザヤ書 37 章の中に、アッシリアのセナケリブのことが書かれています。Ⅱ列王記 18 章辺りにその話が出て来ます。アッシリアが南王国ユダを攻めようとして大軍を遣わしました。アッシリアのセナケリブは一人の使いを送りました。その使いはラブ・シャケと言いましたが、彼は王のメッセージをユダの王ヒゼキヤに伝えるのです。イザヤ書 36 : 4 にこのように書かれています。「ラブ・シャケは彼らに言った。「ヒゼキヤに伝えよ。大王、アッシリヤの王がこう言っておられる。いったい、おまえは何に拠り頼んでいるのか。」と。アッシリヤ王の傲慢さが表われています。また、後に送られた使いの者も次のように言って神を冒瀆しています。37 : 10-13 「ユダの王ヒゼキヤにこう伝えよ。『おまえの信頼するおまえの神にごまかされるな。おまえは、エルサレムはアッシリヤの王の手に渡されないと断言している。』11 おまえは、アッシリヤの王たちがすべての国々にしたこと、それらを絶滅させたことを聞いている。それでも、おまえは救い出されるというのか。12 私の先祖たちはゴザン、ハラン、レツェフ、および、テラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神々が彼らを救い出したのか。13 ハマテの王、アルパデの王、セファルワイムの町の王、また、ヘナやイワの王は、どこにいるか。』」と、つまり、アッシリヤ王の言ったことは「我々の先祖たちはそれぞれの国を滅ぼし王も滅ぼして来た。いったい、どの神々が私たちの軍勢に打ち勝つことができたか？我々の軍勢はあらゆる神々を打ち滅ぼし、あらゆる国々を滅ぼして来た。ヒゼキヤ、いったい、おまえは何に拠り頼んでいるのか？」です。このアッシリヤ王がいかに傲慢であったのかが分かります。そして、彼がいかにこの真の神を冒瀆したのか、そのことがこうして記されています。自分の力に、自分の軍隊に非常な過信をしていました。「無敵の軍隊である。我々はあらゆる国々を滅ぼしてきた。」と。37 : 15-20 にはヒゼキヤ王の祈りが記されています。

「ヒゼキヤは【主】に祈って言った。16 「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、万軍の【主】よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。17 【主】よ。御耳を傾けて聞いてください。【主】よ。御目を開いてご覧ください。生ける神をそしるために言ってよこしたセナケリブのことばをみな聞いてください。18 【主】よ。アッシリヤの王たちが、すべての国々と、その国土とを廃墟としたのは事実です。19 彼らはその神々を火に投げ込みました。それらは神ではなく、人の手の細工、木や石にすぎなかったのです。20 私たちの神、【主】よ。今、私たちを彼の手から救ってください。そうすれば、地のすべての王国は、あなただけが【主】であることを知しましょう。」その後何が起こったのか、皆さんご存じでしょう？このアッシリヤ王セナケリブのその後です。イザヤ書 37 章 36 節辺りに記されています。36-38 節「【主】の使いが出て行って、アッシリヤの陣営で、十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな、死体となっていた。37 アッシリヤの王セナケリブは立ち去り、帰ってニネベに住んだ。38 彼がその神ニスロクの宮で拝んでいたとき、その子のアデラメレクとサルエツェルは、剣で彼を打ち殺し、アララテの地へのがれた。それで彼の子エサル・ハドンが代わって王となった。」と、子どもに殺されていくのです。無敵だと言って奢っていたあの軍隊は、主の使いによって一瞬の内に滅ぼされてしまったのです。

これが聖書の教える神です。敵が何百万、何千万、何億いようと、一瞬のうちに滅ぼすことのできる神です。旧約の時代を見るなら、確かに、多くの人がこの神に逆らって、その神よりも自分たちの力を信じて、また、人間を信じて神に逆らい続けました。神はその人たちを滅ぼされました。そのことは今も変わっていません。ですから、主が今も私たちに警告されることは、すべてのものの創造主なる真の神を信じその方に信頼して生きるのではなくて、それ以外のものに信頼を置いて生きるなら、神の審判があるということです。マリヤはそのことを告白するのです。そのような人たちに神はさばきを下して来られたということです。

7. 必要を満たしてくださるお方 52b-53a 節

52 節の後半から 53 節の初めに「低い者を高く引き上げ、53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、」とあります。

1) 助け、励まし

この「低い者を高く引き上げ」とは「助け、励ましを与える」という意味です。ここで使われている「低い者」ということばは 48 節では「卑しい」と訳されていました。52 節ではこのことばの形容詞形が使われおり、48 節では名詞形が使われています。つまり、マリヤは「こんなに弱

い、こんなに愚かな罪深い低い私を、主が高く引き上げてくださった。」と言うのです。マリヤはその神を愛して、その神の奴隷として従い続けようと思いました。彼女は言うのです。「私を高く上げてくださるのは神だ」と。彼女は力の拠り所を自分に置いていません。彼女は自分の信仰生活における力の拠り所を神に置いているのです。ですから、この52節でマリヤが告白したことは「確かに私は弱い者であり、確かに私は助けを必要とする者だけれども、そのような私に神は常に助けと励ましを与え続けてくださる。私の力はこの神のうちにある。」です。

今朝、イザヤ書のみことばを読んでいましたが、40章にこのように記されています。29-31「**疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。：30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。：31** しかし、【主】を待ち望む者は新しく力を得、驚のように翼をかって上ることができ

る。」と、皆さんよくご存じです。イザヤが言っていることをもう一度見ると、みな疲れる、でも、その疲れた者にだれが力を与えてくれるのか？イザヤも確信していたのです。神がその力を与えてくれると。「若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。」、しかし、その人たちを高めてくれる、その人たちに力をくれるのは神だと言います。31節でなぜ「驚」を使ったのでしょうか？なぜ、鳩や他の鳥にできなかったのでしょうか？鳩なら高く上がるためには一生懸命羽ばたかなければなりません。しかし、驚は谷底から上がって来る上昇気流を捉えるので、羽ばたきをすることなく天へ舞い上がっていきます。私たちの信仰の歩みにおいても大切なことは、私たちを高めてくださる神のその力に依存して生きることです。私たちはすぐに鳩のように一生懸命自分の翼を羽ばたかせながら頑張ろうとします。しかし、そこには限界があります。もし、私たちがそのようにするなら、何かを達成したときには確実に自分自身に栄光を横取りしてしまいます。

このマリヤのメッセージ、歌を見た時に、彼女は一度たりとも自分を誉め称えていません。彼女の称賛の対象は神なのです。彼女は言います。「私がこうして救いに与ったことも神の恵みであるし、こうして信仰の歩みを歩ませていただいていることもすべて神の助けです。」と。ですから、彼女は「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」と言ったのです。この方だけが誉め称えられる方だ、この弱い私に力を与え励ましを与え、助けを与え続けてくださる方はこの神だと。

2) 必要

そして、ルカ1：53に「**飢えた者を良いもので満ち足らせ、**」とあります。彼女は知っているのです。この神は私のすべての必要を満たしてくださることを…。物質的な必要においても、精神的な必要においてもその通りで、何よりも霊的な必要においてもそうです。神を忘れて神に背いていた時、私たちは霊的に渇き切っていました。その渇きを満たしてくださったのは神のわざです。そして、その信仰生活においても神が必要を満たしてくださるのです。だから、ダビデがこのように言ったことを覚えていませんか？「【主】は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。」（詩篇23：1）と。ダビデはなぜそのように告白できたのですか？彼も神がすべての必要を満たしてくださる方であることを確信していたからです。ダビデはいのちを狙われました。家庭の中も大変でした。辛いこと、悲しいことがいっぱいあったけれども、彼は神にあって満足していたのです。

*** 主なる神だけが本当の満足を与えるお方です。心を満たしてくださる唯一のお方です。**

*** 主なる神だけが、罪に染まった心を洗い清めてくださり、新しくしてくださるお方です。唯一の救い主です。**

*** だから、主を信じ、主に常に信頼を置きながら、マリヤは主のみこころに従い続けていきます。**

今朝読んだみことばの中にこのような大きな慰めがありました。イザヤ書40：11です。

「主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。」と。すごいと思いませんか？神がどんなことをあなたや私のためにしてくださっているのか？「主は羊飼いのように、その群れを飼い、」、私たちを養ってくださるのです。そして、その「御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き」、弱い幼い子羊である私たちを羊飼いが抱いてくださっているのです。そして、「乳を飲ませる羊を優しく導く。」、私たちをちゃんと導いていってください、これが私たちの神だと言うのです。私たちの必要をちゃんと満たしてくださる、マリヤはそのことを知っています。ですから、そのことを覚えて神に感謝をささげるのです。

8. 真実なるお方 54-55節

マリヤは「私の神は救い主であり、私の神は恵みに富んだお方であり、私の神は全能のお方であり、私の神は聖なるお方であり、あわれみ深いお方であり、そして、さばき主であり、私の必

要を満たしてくださるお方であり、」と、そして、最後に54－55節で「私の神は真実なるお方である。」と言います。つまり、約束を守られるお方だということです。そのことは54節から記されています。

1) イスラエルをお助けになりました

54節「主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもべイスラエルをお助けになりました。」旧約聖書を見ると確かに、神はイスラエルを守ってくださった、なぜ？今も守っておられる、なぜ？神は約束を守られるからです。そのように約束なさせてその通りにイスラエルを守り続けておられます。

2) アブラハムへの約束を覚えておられる

55節「私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」、みことばが言うように、アブラハムとその子孫に語られた約束を神は守り続けておられると。だから、神が言われたことは必ずそうなるし、ゆえに、私たちは確信が持てるのです。神があなたを救ったと言われたなら絶対に救われたのです。それには神の約束があるからです。不変の神がその約束を与えてくださっているからです。詩篇98：3に「主はイスラエルの家への恵みと真実を覚えておられる。地の果て果てまでもが、みな、われらの神の救いを見ている。」と記されている通りです。

さて、この八つのことを我々は見て来ました。マリヤは「私の神はこのような神だ。称賛に価するお方であるすばらしい偉大な神だ」と歌います。確かに、その通りです。感謝なことに、このような神が私たちの神でもあります。あなたの神であり私の神です。私たちともにこの方を賛美し続ける、この方を誉め続ける、そのことが大切です。

今から残された時間にもう少し見ていきたいことは、実は、今私たちが見て来た彼女がささげたこの驚くべき喜びと感謝による主への称賛は、主なる神の偉大さを教えてくれるだけでなく、同時に、マリヤという信仰の姉妹に関するいくつかの大切なことを教えてくれるのです。マリヤがどういう人物だったのか、どういう信仰者だったのか、今から五つのことを見ます。

* マリヤはどのような信仰者であったか

1. 自分の罪深さを正しく知っている信仰者

そのことはこの称賛の中にあふれています。「この卑しいはしために」ということばは、先程見たように「身分が低い、地位が低い」という意味でしたが、同時に、このことばには「心が汚れている」という意味があります。彼女は自分がどれ程罪深い者であるかをよく知っていたのです。

2. 謙遜な信仰者

3. 感謝する信仰者

主の恵みが語られています。「主がこんな私に目を留めてくださった」とそのように彼女は告白します。恐らく、彼女は「私にはこの主なる神のご好意に与る資格も値打ちもありません。でも、主がこんな私に目を留めてこんな祝福を与えてくださった。だから、私はそのすばらしい神を誉め称えます。」と言うのです。信仰者の皆さん、私たちはいったい何を誇るのでしょうか？マリヤの唯一の誇りは神でした。こんな私を救ってくださり、私にこんなにも恵みをくださったとその神を彼女は心から誇っていたのです。かつて、私たちはいろいろなものを誇っていました。この世の地位かもしれないし、財産かもしれないし、教育、職業かもしれないし。いろいろなものを誇っていました。でも、私たちはそのようなものから解放されたのです。マリヤと同じように私たちにもただ一つ誇るものがあるのです。私たちの神です。

エレミヤのことばを聞いてください。「【主】はこう仰せられる。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。：24 誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは【主】であって、地に恵みと公義と正義を行う者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。——【主】の御告げ——」（エレミヤ書9：23－24）。

いったい、私たち信仰者は何を誇って生きるべきでしょうか？私たちの誇りはただ一つです。こんなにどうしようもない私たち、こんな罪深い私たちを神があわれんでくださり、気に留めてくださり、目をかけてくださり、そこから救い出してくださり、私たちを生まれ変わらせてくださった。永遠の希望を与えてくださり、永遠の祝福を与えてくださり、そして、私たちを生かしてくださっている。この神こそが私たちの誇りだと、そのような者として私たちは生まれ変わったのです。マリヤは、確かにそのことを誇り、そのように生きていました。ですから、何一つ、彼女は自らのことを誇っていません。なぜなら、私たちがこの地上で得たものは私たちがこの世を去る時に全部置いていくからです。彼女はこの神だけを感謝し誇っていたのです。

主イエス・キリストご自身も弟子たちにこのようなことを言われました。弟子たちを遣わしてその弟子たちが戻って来たときに、彼らは「イエスの名によって命じたら悪霊たちが出て行った。」と言って、そのようなすばらしい奇蹟を行なって意気揚々とイエスの元に戻って来たのです。そのときにイエスが何と言われたか？ルカ 10：20「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」と言われました。「アーメン！」と思いませんか？私たちが喜ぶべきことは私たちの名が天に記されていることです。神は私たちに天に国籍を与えてくださったから、私たちは天国民として今生きることができるのです。罪の赦しをいただいたこと、それこそ私たちの誇りです。この神こそが私たちの誇りです。彼女はそのような人物でした。だから、彼女は感謝するのです。この歌を見た時に、ここに出て来るのは神への感謝、神への称賛です。このような恵みによって救われたことを知っていたゆえに、彼女はこの神を称え続けたのです。そのような信仰者でありたいですね。自分の本当の罪深さを知り、そんな自分に与えられた神の恵みを覚え、その神をいつも感謝しながら生きる、彼女はそのような人物でした。自分のことを正確に知っていたゆえに、へりくだった謙遜な人だったのです。

4. 従順に歩んだ信仰者

ルカの福音書 1 章の 38 節に書かれています。マリヤはまだ処女であるのに子どもを産むということを知りました。彼女は「どうしてそのようなことになりえましょう。」とそう思ったのは自然なことです。ところが、37 節「神にとって不可能なことは一つもありません。」と言われたときにマリヤはこのように言います。38 節「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」と驚くべきことを言うのです。ここで彼女は「私は主のはしためです。」と言っています。思い出してください。この「はしため」とは「奴隷」という意味です。ですから、マリヤは「主よ、私はあなたの奴隷です。主人であるあなたがおっしゃることに私は従って行きます。」と言うのです。私がどう思うかではない、私がどう判断するかではない、私たちがどう受け入れるかでもありません。あなたが主人であり、あなたがおっしゃったことがなりますようにと言います。だから、マリヤは祝されたのです。このように神を信じて従い続けた人物だからです。

5. 主に信頼を置いた信仰者

45 節を見てください。「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」と、これはエリサベツが言ったのですが、だれのことを言っていると思いますか？マリヤのことです。エリサベツはマリヤに対して「あなたは主によって語られたことは必ず実現すると信じきっている人だ」と言うのです。神のおっしゃったことは必ずそうなりますと、そのような強い信頼を置いて生きていた人物だったのです。神を疑うことがなかったのです。だから、神は彼女をこのような特別な働きにお用いになったのです。それは彼女が主に用いられるにふさわしい歩みをしていたからです。

さて皆さん、私たちはみことばを通して、主がすべての人、信仰者を用いてくださるということを知っています。神はあなたをお用いになってくださるとそのことを確信しています。しかし、このみことばを聞いてください。Ⅱテモテ 2：20「大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。」。家の食器棚の中に、尊いことに用いる器もあるし卑しいことに用いる器があると、どちらも器なのです。主人が尊いことに用いるか、卑しいことに用いるか、私たちが考えなければいけないことは私はどちらの器か？ということです。卑しいことに用いられる器なのか、それとも尊いことに用いられる器なのかです。もっと言えば、あなた自身はあなたを救ってくださった神によって「尊いことに用いられる器になりたい」とそのように願っているかどうかです。もしそうなら、次の 21 節のみことばを聞いてください。「ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。」と、つまり、あなたが自分の歩みしっかりと吟味して、主の前に正しく主が喜ばれるように歩んでいるなら、罪から離れて歩んでいるなら、神はあなたをそのような器として用いてくださると言うのです。神が意地悪ではないのです。問題は私たちがどのような生き方をするかです。マリヤという人物を見た時に、彼女は主を愛するがゆえに、主が喜んでくださるように歩み続けました。救われたことを感謝するだけでなく、この主を愛してその主のみこころに従って行こうとしました。そして、その歩みにおいて彼女は神の助けをいただきな

がら歩み続けました。どんな時でも主の約束を信じ主に従い続けて行きました。だから、彼女は尊いことに用いられたのです。そして、今からでも神はあなたを尊いことに用いてくださいます。そのカギは何かお分かりですね？そのカギは私たちがそれにふさわしく生きているかどうか、それにふさわしく生きていくかどうかです。そのように歩んでいるなら、神はこれまであなたを尊いことに用いてくださったからどうぞ続けてそのように生きてください。でも、もしそうでなかったら、今日、私たちはそのような歩みを始めることができます。なぜ、神がこんなにすばらしい祝福をマリヤに与えたのか？そこには理由がありました。マリヤがこのような信仰者だったから神は彼女を大いに用いたのです。神は今あなたが置かれているところで大いに用います。そのことを望みながら、そのことを期待しながら、私たちは生きていくべきではありませんか？

どうぞ信仰者の皆さん、この地上に残された短い時間を神にとって役に立つ者、神の尊いご用に役に立つ者として歩んで行きましょう！！でも、そのためにはどういう選択をするかにかかっています。しっかりと主を見上げて、罪を告白して、そして、主のみことばに従い続けていくことです。そのときに主が使ってくれるからです。すばらしい希望があります。あなたも私もまだこれから主によって用いられるという希望です。どうぞ、そのように生きてください。どうぞ、そのように生きていきましょう！そして、私たちのすばらしい主を、私たちはことばをもって、そして、私たちの歩みをもって証し続けていきたいと思います。

《考えましょう》

1. マリヤが主に喜んでいたことは明らかですが、その理由を書いてください。
2. 主がマリヤをお用いになられたのは、どうしてだと思えますか？
3. マリヤの信仰からあなたはどのようなことを教えられましたか？
4. あなたはどのようなことを今日主に対して決心しましたか？